

ヨーゼフ ボイス展
「直観／思考／形」

1986年に64歳で没してなお、ヨーゼフ・ボイスは、今日の現代美術の中で最も影響力を持つ作家の一人として、その重要度はますます高まり続けています。マルセル・デュシャンやジョン・ケージといった20世紀の巨匠の人生やアートと同様に、ボイスの関心と影響は、形而上学、アート、環境問題、さらには政治といった広範な分野を取り込んでいました。

そうしたボイスのアートの中心的なテーマは、従来の芸術概念を拡張して（拡張された芸術概念）、あらゆる人は理想社会という彫刻（社会彫刻）をつくる芸術家である、という彫刻理論を提唱したこととして知られています。それによって、アートは社会の中でより広くどのようにその役割を演じることができるかを進化、発展させていきました。

ボイスの精神的で民主的な効率の良い社会を作ることを目的とした社会彫刻の理論では、古い社会というものは硬直し、やがてそれは機能しなくなるので、それを人間が変革しなければならないと考えられています。その意味で、あらゆる人間は創造的な存在でなくてはならないと考えられました。そうしたボイスの作品制作意図にしたがって、観者であるわたしたちには、いかに創造的になりえるかという事が求められております。

本展のタイトルである「直観／思考／形」は、ボイスの作品制作のプロセスを示したものです。そのプロセスは創造性そのものと言えるかもしれません。本展では、「直観」と名づけられた作品、そして思考としてのドローイング作品、形としての彫刻やオブジェ作品など、1950年から85年に制作された40余点の作品群が当館所蔵のコレクションから出展されます。本展が、皆様と一緒に創造性について考えてみる機会となれば幸いに存じます。

フォーエバー現代美術館
チーフキュレーター 加藤 淳